



龍溪樞李集

5  
4403





4403

門へ 5  
號 4403  
巻



俳諧極楽亭

木つゝとんと云き人制して曰おの心あるや  
と月を御よめなうらゝのつたをいそん  
余美て曰夫俳諧の活きなるや實に流行  
みて実なる流のやしたまを一圓郭に添て  
人を追つて走るうおとし先きもの却る



ほろろとよき追ふるが素波の先ほ  
何をひいてきたるもむやち日におのり胸  
懐とくはしめてはるるあつらひ  
聖ハ又あつらひの排遣や題してすすむ  
さめりかよももこ一かし是は集の大意

蕪村識

昭和九年  
九月二日  
藤末

蕪村

牡丹散るおのりも二三片  
卯月廿日乃ありぬの影 几董  
すそがよそはあや門をひらき  
舞のそとへ来てはへんが村  
身中し街の樓着入て  
百里の陸地よりはこす 董



手控齋藤のうすのあけよ  
 山田のふ田乃早稻を川比  
 夕月はほれくはる四十雀  
 秋をうれひてひる戸な傍  
 目わらと苦き薬をすらなる  
 當麻へもとれた風はあま文  
 隣ろそまじと色のする油うり  
 三尺はしる雪のそらうたれ  
 村董 村董 村董 村董 村董

餅よりゆる狼うちたし一のりぬ  
 兎唇の毒乃そら泣きあふ  
 鐘濤ある花のみそら髪きり  
 春のゆく雷乃西にゆめく  
 能登との、弦音かきむきうれ  
 博士いりそら時を占ふ  
 栗負し馬倒ゆめと鳥啼て  
 標吹ぬる 野 八所  
 村董 村董 村董 村董 村董



立河地虹子海間のうちけり  
勅使の御宿より建しと  
江は獲る鯿の魚の腹赤ま  
白いしーやのうとあられ  
見一恋の見ぬいと堂供養  
はかりにさるくあまこ  
十六夜乃晴ふいよと世のうさ  
志ころおれる番場松本  
村 董 村 董 村 董 村 董



が界の樽組足らぬ秋乃返  
鷹も物もあまらむと居る  
宗子の田中の小社神といて  
既 玄番りらりも負色 村 董  
祀よるまかに旅籠屋に飯とけ  
やこむらやと世をらるり火 董



几董

冬あしもう月骨髄入夜あ

此句老杜の寒くふ 賜 燕村

五里は一居かゝる使者を覚え

茶の味くく地はさく井の水 董

すく池水雀の飛くかゝるん

を赤つゝく疊成とら出て 村

この尻乃山記を能くかゝれ住

七ツ限リ乃川敲く音 董

而のひらに救の糧やかゝり来也

弾きくむれやの浦く 董

女執り深ふ眼をさへ返りし

染うかゝるは鬢のわさみ 董

いさをしとやうくをよめぬん

出船つまかゝる追風吹飲 董



月夜て氣比の心もさう闇よ  
鹿の来て部す我中のる  
文机乃を打拂ふ維摩經  
臥痛を忍ぶ逢ふ日の光  
鄙人の妻よとこれ旅の末  
水はありし酒屋一らん  
荒神の相々夜泣の鶏啼を  
歳暮乃花脚おとせや  
村董 村董 村董 村董 村董

保昌<sup>ヤマノ</sup>の仕もかばや道ぬむ  
いばくまひ白し山嵐の夜  
むら雨の垣種とむ越阿方る  
三ツよ暮んておろすむら  
西國乃も飛くけ丸小日のこれ  
分負しき藝の是をやりり  
片側を燈川流るる能の風  
月の夜そら乃をささいあつ  
村董 村董 村董 村董 村董



仰るる人あき車冷しよ  
 相國の磔今やうはし  
 添りしあすしり眠うさむつ  
 雍<sup>モタヒ</sup>のあ<sup>阿修羅</sup>のひをくとあ  
 根継する屋けの礎の下るよ  
 巢つくる蜂の子あいのり  
 村 董 村 董 村

安永九庚子冬霜月

大正甲子如月乃らば拙藏本一を模写し  
 表装して不言言先生に贈る





